

# 九州の西側は私たちが守る

長崎税関は、九州西側の複数の県を管轄し、管轄区域は南北に直線距離で約1,000kmと長く、多くの離島(約1,200)及び不開港(約700)を有しています。管轄内には本関のほか、支署(4)、出張所(10)、監視署(2)の合計16官署を設置し広い管轄区域をカバーしています。

長崎税関は、過去に不正薬物の摘発のあった中国大陸や東南アジアに地理的に近いことから、不正薬物等の洋上取引事案も発生しています。このことから長崎税関では洋上での密輸取締りも重要な対策の一つとして取り組んでいます。

近年は、LCCを中心とした航空路線の増加・国際クルーズ船の入港の増加が特徴としてあげられ、このような空港・海港においても密輸取締りを行っています。



1 本関庁舎(昭和3年) 2 監視艇なんせい 3 出島図(長崎歴史文化博物館所蔵) 4 湊会所跡 5 長崎会所跡 6 梅香崎庁舎(長崎大学附属図書館所蔵) 7 寛永長崎港図(長崎歴史文化博物館所蔵)

8 年末特別警戒の出陣式 9 運上所跡 10 本関庁舎(現在)

## 長崎港と長崎税関の歴史

長崎港は、ポルトガル船が入港した安土桃山時代の元亀2(1571)年に開港し、令和3(2021)年に開港450年を迎えました。鎖国時代には出島を中心に外国との貿易で栄え、日本の玄関口として外国の産業・文化の受け入れに重要な役割を果たしてきました。明治時代には上海航路などの連絡船が寄港する歴史のある貿易港として発展してきました。

長崎税関の歴史は、外国貿易を総括する機関として「長崎会所」(長崎税関の前身)が設置された元禄11(1698)年から始まります。その後、安政の開国に伴い、安政6(1859)年に長崎会所の一部に湊会所が設置され、文久3(1863)年に長崎運上所と改称されました。そして明治5年11月(1872年)、運上所は税関へと改称されました。

第2次世界大戦により外国貿易が中断されると、税関は一時海運局に併合されましたが、昭和21(1946)年に再開しました。その後、昭和28(1953)年に門司税関から独立しました。

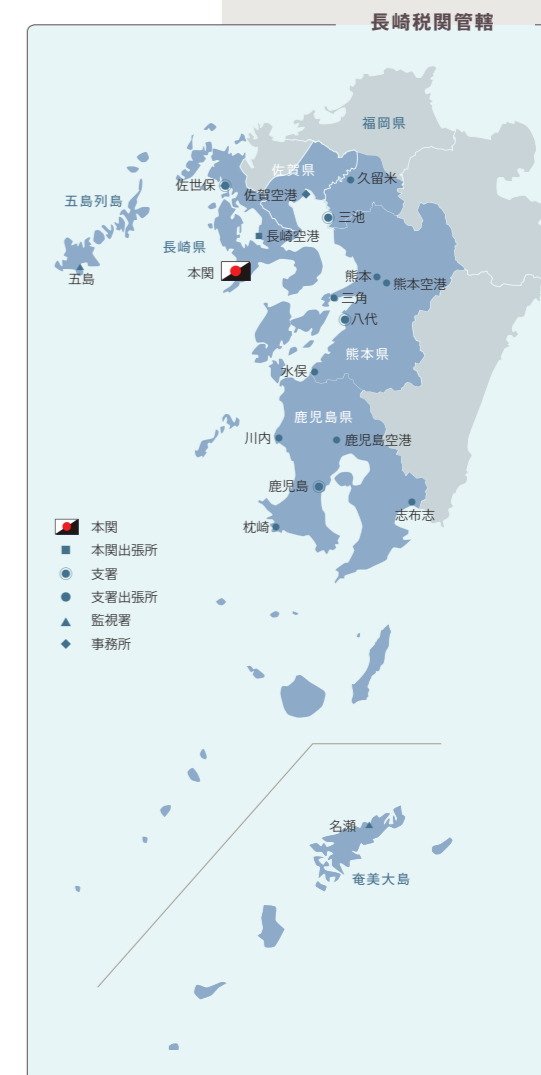
このように長崎港の歴史は、450年前のポルトガル船の入港から現代まで続いており、鎖国時代から税関が行ってきた業務についても脈々と受け継がれてきました。

また、長崎税関関連の歴史的資産として、管内には明治時代に建築された庁舎(旧長崎税関下り松派出所(長崎県長崎市)、旧口之津税関支署(長崎県南島原市)、旧三池税関支署(福岡県大牟田市)が現存しており見学することができます。

### 洋上取引による摘発実績

長崎税関ではこれまで他税関や関係機関と協力して、洋上での大量の不正薬物等を摘発してきました。主な摘発実績は以下のとおりです。

- ▶▶ 平成11(1999)年 鹿児島県南さつま市(黒瀬海岸)における覚醒剤密輸入事件(約567kg)
- ▶▶ 平成28(2016)年 鹿児島県徳之島における覚醒剤密輸入事件(約100kg)
- ▶▶ 平成29(2017)年 佐賀県唐津市における金地金密輸入事件(約206kg)
- ▶▶ 令和元(2019)年 熊本県天草市における覚醒剤密輸入事件(約587kg)



### 長崎税関の管轄

長崎税関の管轄区域は、長崎県(壱岐・対馬を除く全域)、福岡及び佐賀の両県のうち、有明海に近接する地域(久留米市、大牟田市、佐賀市等)、熊本県並びに鹿児島県の広範囲に及んでおり、管内には外国貿易のために開かれた15の開港と4つの税関空港を有しています。管轄が南北に長く、北は長崎県から南は与論島(鹿児島県)までの直線距離は約1,000kmに及び、長い海岸線と多くの離島・不開港を有しています。

(令和4(2022)年4月現在)